



Title	大洗の山村暮鳥詩碑建立
Author(s)	竹本, 寛秋
Citation	雲, 17, 37-43
Issue Date	2012-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50050
Type	journal article
File Information	2012173743.pdf



大洗の山村暮鳥詩碑建立

竹本 寛秋

一 はじめに

昭和二年茨城県磯浜海岸に建立された山村暮鳥詩碑建立の経緯に関する検討については、既に和田義昭をはじめとした優れた論考がある¹⁾。また、小山茂市の『暮鳥伝』²⁾や、木戸清平などによる知見もあり³⁾、事実関係に関する考察の余地は多くはないと考えられる。

しかし、本稿では、大洗暮鳥詩碑建立八十五年の年となる本年、改めて、暮鳥没後から、昭和四年頃までを射程に入れることで、暮鳥氏碑建立という出来事をとらえ直してみたい。山村暮鳥の詩碑建立は、建立された時点で終わる類の出来事ではなく、詩碑建立の後に刊行される、『暮鳥詩集』⁴⁾や、『土の精神』⁵⁾、あるいは、百田宗治が暮鳥の詩に鑑賞をつけて送り出した『鑑賞山村暮鳥選』⁶⁾、さらには、新潮社により昭和四年から刊行が始まる『現代詩人全集』⁷⁾など、その後の暮鳥に関する書籍の出版や、「山村暮鳥」という詩人のイメージ形成と深く関係する、まさに「はじまりの出来事」としてある。もちろん、「暮鳥会」の設立も、その流れの中に位置づけられるべきであろう。

本稿では、そうした視点から、大洗の暮鳥詩碑建立という出来事をもう一度たどり直していきたい。

二 大洗の暮鳥詩碑の選定は誰が行ったか。

大洗の暮鳥詩碑に刻まれた詩「ある時」を、誰が選んだか、ということに関しては、いくつもの論考がある。木戸は、小山茂市の『暮鳥伝』の記述を引きつつ、小川芋銭は「梅」を主張したが、建設委員は、結果として萩原朔太郎の意向を汲んだと述べている⁸⁾。和田は、萩原朔太郎が「雲」を選んだのは積極的な選択ではないと唱えた。和田が問題視したのは、山村暮鳥『聖三稜玻璃』をあれほど高く評価した朔太郎が、「雲」を選んだこと、朔太郎が選んだにも関わらず、朔太郎自身が詩碑の除幕式に姿を現さなかったことである。そして、土田家所蔵の建碑の趣意書の記述から、詩碑建立の中心人物が雑誌『苦惱者』の主要メンバーである大関五郎、柳橋好雄、高井能であり、碑石、台石の提供が柳橋好雄であったこと、揮毫は小川芋銭と決まっていたことを引きつつ、建碑の中心は柳橋好雄と小川芋銭と推測し、彼等の意向が詩の選定に力を持ったと結論づけている。同時に、大正十五年一月二十八日付の柳橋好雄宛の萩原朔太郎書簡を取り上げ、「万事御決定ありし上は致し方なし」と、朔太郎が不本意ながら暮鳥詩碑の選定を受け入れたことを明らかにしている。

さて、筆者も、朔太郎書翰に明らかかなように、朔太郎は、たとえ「裏面」でも良いから『聖三稜玻璃』の詩篇を刻んでほしいという思いを抱きつつ、詩碑の選定を引き受けたと

いう和田の結論に異論はない。また、だからといって、柳橋好雄を悪く思う気持ちもない。詩碑の建立にはお金がかかる。寄付金を集めるには、看板が必要である。さらにまた、詩碑に刻むスペースには限りがある。さまざま人の、さまざまな思いが交錯するのは当たり前の話である。そうした制約の中、山村暮鳥の詩碑建立を実現するために、誰がどのように動いたのか、ここで、より細かく追ってみたい。

まず、暮鳥詩碑建立の実現に向けて、実質的に動いたのが柳橋好雄であることは、ほぼ間違いない。大正十四年十二月六日に、水戸市商工会議所を会場にして行われた「山村暮鳥氏追悼会」において、はじめて暮鳥詩碑建立のアイデアが出されたことは、『茨城文藝』『日本詩人』複数の記事からわかる¹⁰。これらの記事には共に、柳橋好雄が磯浜に暮鳥詩碑建立の思いを語ったことが記されている。そして、柳橋好雄は、その考えを即座に行動に移している。萩原朔太郎の大正十四年十二月二十九日付け室生犀星宛書簡には、柳橋が朔太郎に送付した詩碑建立に関する書簡が同封されていた¹¹というから、柳橋が追悼会后、即座に萩原朔太郎に対してアクションをとったことがわかる。そして、柳橋が朔太郎に送った最初の書簡の内容は、朔太郎の記述から推測すれば¹²、詩集『雲』から選んだ候補となる二つの詩を提示した上で、朔太郎に、どちらがよいか選ぶよう頼むというものであったことが推察される。というのも、朔太郎は犀星宛書簡において、柳橋の依頼に言及し、「僕は主意に対して大に賛意を表しておいた。たゞ碑銘の詩選については不満がある。あんな拙い詩（二つ共）を碑として永世に残すのでは、暮鳥の霊も浮かばれまい」と記しているからである。朔太郎は、暮鳥の詩碑を建立する主意には大賛成だが、柳橋の提示した「拙い詩」を碑に刻むことには大反対であり、そのことを室生の口からも言っていてやってほしい、という主旨で書簡を送っているのである。

さて、話は前後するが、大洗の暮鳥詩碑の選定について、現在では萩原朔太郎の名ばかりが挙げられるが、当時の記事を見るならば、必ずしも朔太郎だけに白羽の矢が立ったわけではない。実際、詩碑の寄付を大々的に呼びかけた『日本詩人』大正十五年四月号では、詩の選定は、「室生犀星、萩原朔太郎」に依頼すると記されているし、この呼びかけを書いた百田宗治は、昭和四年の『鑑賞暮鳥詩選』では、勘違いなのか意図的なのかはわからないが、詩の選定をしたのは室生犀星であると記している。

朔太郎が、柳橋の書簡を犀星にも送り、意見を求めているところを見ると、柳橋は、室生犀星への打診も念頭におきつつ行動していたと考えるのが妥当だろう。そうでなければ、朔太郎が、犀星からも柳橋に意見するよう頼むこと自体、考えづらいことになる。

また、山村暮鳥の死去に伴い、東京で「暮鳥忌」を主催したのは室生犀星である。室生犀星は、暮鳥没後の「いはらき」にて既に、「毎年十二月八日」を「暮鳥忌」とし、自身が主催することを明言している¹³。実際に一周忌となる大正十四年十二月八日には、東京・田端大龍寺にて、「暮鳥忌」を執り行っている¹⁴。その意味で、室生犀星と併せて萩原朔太郎に打診することには十分な妥当性がある。

朔太郎に話を戻すならば、萩原朔太郎が詩碑の詩を選定する際に提示された選択肢は、

従来考えられてきたより遙かに少なかったと考えられる。先に見た大正十四年十二月二十九日付けの室生犀星宛の書簡からは、『雲』に収められた詩の二つから選ぶよう示されたと考えられるし、大正十五年一月二十八日付けの柳橋好雄宛書簡から見るとすれば、柳橋は、詩集『雲』の中から選ぶように朔太郎に頼んでいる。朔太郎が、その前提のもとに詩を選んでいることは、『雲』一巻中にてはこの二篇にまさる詩なく、その上、二首共に暮鳥君の本質的な芸術的領域を代表してゐると思ひます」と、『雲』一巻中にては「¹⁵とわざわざ断っていることから読み取れる。朔太郎が、『聖三稜玻璃』の価値を言挙げし、詩碑に対する自己の考えを柳橋に対して述べるのは、依頼に添った回答を行った後であり、その意味で、ここでの朔太郎の態度は非常に紳士的である。朔太郎は、柳橋の依頼は依頼として回答した上で、詩碑に刻むべき詩は「詩人の生涯における最大の名誉を記念する」ことが第一義なのだから、本来であれば『聖三稜玻璃』の「だんす」といった詩を刻むことがふさわしいと自分としては思うというのが、朔太郎が柳橋に対して取った態度なのである。

また、小川芋銭の提案についても、却下されたことは木戸が既に指摘する通りである。ただし、却下の理由は、萩原朔太郎への配慮ではなく、柳橋を中心としたメンバーの意向である。萩原朔太郎、小川芋銭とも、詩碑に刻む詩として「長さ」を気にしており、朔太郎が最初に提示した詩は、一つ目が五行、二つ目が六行であった。現在刻まれている「ある時」は朔太郎が予備として提示した二つの詩のうちの一つであり、朔太郎は、これらの詩の行数が多いことを心配していた。小川芋銭は、柳橋の打診に対して、「梅」を提示した。その際、「石面比較的狭ければ文字少なく」とやはり、詩碑に刻む上での文字数の多さを憂慮している¹⁶。

柳橋の迅速な行動の結果、詩の選定自体は『日本詩人』誌上で寄付が公表された頃には、ほぼ固まっていたと考えられる。朔太郎が「御決定ありし上は致し方なし」と述べているのは、大正十五年の一月付書翰であり、芋銭の柳橋への返答は大正十五年三月三十日付の書翰¹⁷である。「故山村暮鳥詩碑建設会のこと」が『日本詩人』に掲載され、本格的に暮鳥詩碑への募集が開始されるのは大正十五年の四月である¹⁸。もちろん、仕様が固まらなければ目標額も決まらないとも言えるが、詩碑の建設について、根回しから寄付募集の公表までに要した期間は、わずか四ヶ月程度である。

さて、これらを踏まえて、本節の問いに答えるならば、詩碑の実現に向けて実質的に動いたのは柳橋好雄である。ただ、大関五郎、高井能も中心に入って動いたであろうことは想像に難くない。

百田宗治が、暮鳥氏碑建立への寄付を呼びかける「故山村暮鳥詩碑建設会のこと」を『日本詩人』で発表するとき、「これを書くのは僕の役目ではない」と述べることには、当時詩壇における権威ある組織としての『日本詩人』で号令をかけるべき存在として百田が協力しているのであって、中心は自身にはないことを示す意味を含んでいと読むことができ。そのことは、この計画が「柳橋好雄大関五郎及びアイデア書院主高井能」によって立て

られたと記述していることから読み取れよう。その上で、寄付が開始された時点で既に、詩の選定や、寄付の募集体制についての根回しは、ほぼ終わっていた。決して誤解して欲しくないのだが、こうした柳橋らの動きに対して、筆者は何ら否定的な感情を抱いているわけではない。むしろ、ここまで周到にプロジェクトを動かし、山村暮鳥の詩碑建設を現実化する柳橋以下の機動力と実行力には、脱帽するばかりである。柳橋らの主導的メンバーは、詩碑建立を迅速に実現するために、極めて素早く、現実的な行動を取ったと言えるだろう。

三 詩碑建設、その後

昭和二年六月、大洗の山村暮鳥詩碑は無事完成する。そして、この詩碑は、その後の山村暮鳥関連の出版を牽引することに寄与したと考えられる。

例えば、昭和三年に出された『暮鳥詩集』の巻頭には、森の中に屹立する詩碑の写真が透けるよう、半透明の紙が挟まれ、「これは暮鳥臨終の地から大洗神社の森一つ隔てた子の日ヶ原に、昭和二年五月八日、彼の善き友等の美しい手によつて建てられた暮鳥詩碑です。石は花崗山から切り出し、文字は小川芋銭画伯の筆に成つたもので、碑文は次の一篇です」という言葉が記されている。ここには、「詩碑」によって一冊を統一させる意図が感じられる。その意図に呼応するように、室生犀星の序は「山村暮鳥は美事に完成され、そして寂しい一つの塔を日本詩壇の上に聳えさせている。茨城県磯浜の波はその塔を洗ひそぐために、彼の好む燿かしい朝日の光とともに毎日彼を訪づれてゐるのだらう」と、山村暮鳥の詩業と詩碑を重ね合わせた叙述を行っているし、萩原朔太郎も、「いつか一度、あの瀟條たる磯浜の海辺を歩き、独り意味深い追憶に耽つてみたい」と「磯浜」の地と、山村暮鳥を重ね合わせる読みを誘導する序を寄せている。こうした、「詩碑」を中心とした「磯浜」

という場トポスに山村暮鳥の詩業を束ねようとする意図は、「大洗海岸子の日ヶ原に彼は永遠に眠り、永遠にわれ等によびかけている」といった前田夕暮にも共通している。『暮鳥詩集』を読む読者は、まず、磯浜に発つ暮鳥詩碑の写真を眺め、詩碑という痕跡が呼び起こす記憶¹⁹に枠付けられながら「山村暮鳥」という「詩人」、そして「山村暮鳥」の「詩」を読むこととなる。

さらに、昭和四年二月に刊行された百田宗治の『鑑賞暮鳥詩選』には、「暮鳥の詩碑を訪ふ記」が、「暮鳥自伝」に続いて置かれ、暮鳥が生きた磯浜の「風景」、そしてその「風景」が呼び起こす「山村暮鳥」のイメージが、百田の「鑑賞」を支えている。

このように見てきた上で述べるならば、室生犀星が編集を任される『現代詩人全集第六巻 石川啄木集 三富朽葉集 山村暮鳥集』（昭和四年七月）を、室生犀星・萩原朔太郎による、いわば（これまでに形成されてきた「山村暮鳥」イメージへの抵抗）の試みとして位置づけることを可能にする。

犀星が、この集を刊行するにあたって表明するのは、「山村の本質を新しくむき立て」²⁰。ることである。言い過ぎを恐れずに言うならば、ここで言及される「山村の本質」という言葉は、それまでに形成された「山村暮鳥」イメージを打破する野心を含んだものである。犀星は、『現代詩人全集』「山村暮鳥」の編集方針を、「主として自分が選み、萩原朔太郎がさらに再選して見て呉れ、山村の本質を新しくむき立てようと思うのだ。山村も自分や萩原の手によって選ばれた詩を快よく思ふに違ひない」と、説明する。この記述は、今まで編まれた暮鳥の選集が自分たちの手によって選ばれていないことを示し、朔太郎、犀星自身の手により、これまでに流布した山村暮鳥のイメージを覆し、真の「山村の本質」を明らかにする、という挑戦的な自負として読むことができるものとしてあるのだ。

山村暮鳥を検討する上で、表現上の変遷を、表現として検討することはもちろん重要であるが、時期による交友関係の変遷に注目することも必要である。朔太郎にとつて、山村暮鳥は、いつまでも『聖三稜玻璃』の詩人であり、『苦惱者』以降に深く交友した柳橋好雄や大関五郎などは、語る土台を全く異にしている。

そうしたズレは、詩碑の建立や、選集の出版という、さまざまな思惑が交錯する場において、時に軋轢を顕在化させる。そうであれば、私たちは、「山村暮鳥」という固有名詞に、安定した統一を求めようとすることをやめる必要がある。むしろ、さまざまな亀裂と軋轢をはらんだ存在として、「山村暮鳥」像を、絶えず更新していくこと、それが必要とされているのである。

1 和田義昭「萩原朔太郎の暮鳥評価をめぐって―詩碑の選定を中心に―」『群女国文』昭和五十二年三月

2 小山茂市『暮鳥伝』マツダ印刷 昭和三十九年八月

3 木戸清平「大洗の暮鳥詩碑をめぐって」『週間てんおん』昭和三十九年十二月

4 山村暮鳥『暮鳥詩集』厚生閣書店 昭和三年三月

5 山村暮鳥『土の精神』素人社書屋 昭和四年二月

6 百田宗治『鑑賞暮鳥詩選』金星堂 昭和四年二月

7 『現代詩人全集第六巻 石川啄木集 三富朽葉集 山村暮鳥集』新潮社 昭和四年七月

8 木戸、前掲「大洗の暮鳥詩碑をめぐって」

9 大関五郎の「暮鳥詩碑除幕式の記」によれば、萩原朔太郎は、前田夕暮に対して、除幕式に出る旨を伝えていたようである。そのため、大関五郎や柳橋好雄がずいぶん待った後、一時間遅れで式が始まったことを伝えている。（大関五郎「暮鳥詩碑除幕式の記」『地上楽園』昭和二年六月）

10 「山村暮鳥氏追悼会」『茨城文藝』大正十五年一月一日、大関五郎「暮鳥追悼講演会その他」『日本詩人』大正十五年二月

11 『萩原朔太郎全集 第十三巻』筑摩書房 昭和五十二年二月

12 萩原朔太郎、大正十四年十二月二十九日付室生犀星宛書簡『萩原朔太郎全集 第十三巻』筑摩書房 昭和五十二年二月

13 室生犀星「追憶」『いばらき』大正十四年（『暮鳥研究 第一輯』（昭和十年十月）に採録）

14 「暮鳥忌」『詩神』大正十五年一月。『日本詩人』大正十五年一月の「消息片々」によれ

ば、大正十四年十二月六日に水戸で暮鳥追慕の会が行われ、十二月八日には室生犀星、萩原朔太郎主催で田端大龍寺にて「暮鳥忌」が行われ、同日、青山会館にて日本詩人協会主催の暮鳥の会が行われる予定であると記されている。最後の日本詩人協会主催のものに関しては、その後の記事が出ていないため、詳細は不明であるが、すべて執り行われたのだとすれば、三度の暮鳥追悼会が行われたことになる。

¹⁵ 前掲、『萩原朔太郎全集 第十三巻』

¹⁶ ただし、芋銭は「矢張り雲の方になり候とも文字はしたゝめ可申候」と付け加えている。

¹⁷ 小川茂吉『芋銭子文翰全集 下巻』中央公論社 昭和十五年二月

¹⁸ ただし、趣意書の期日は大正十五年三月五日となっている。

¹⁹ ここでの「記憶」は、実際に山村暮鳥に会ったことがある／＼ないという「記憶」とは無関係である。「詩碑」を結節点として語られ、蓄積される、山村暮鳥に対する様々な記憶の語りを、読み手が否応なしに意識させられるということを意味している。

²⁰ 室生犀星「山村暮鳥のこと」『現代詩人全集月報 第一号』新潮社 昭和四年七月

※資料の蒐集に関しては、加倉井東氏はじめ、暮鳥会の多くの方々のご厚誼をいただいた。この小論は、それら膨大な資料のほんの一角しか扱うことができず、不明を羞じるばかりであるが、この場を借りて謝意を示したい。